

P-041

退院後の電話によるフォローアップの試み

名古屋第二赤十字病院 混合病棟

○鈴木 訓子、山本えつみ、片桐香奈子、杉本 友香

当院は「最高の病院」を目指して様々な取り組みを行っている。その一つとして平成24年度に退院後の患者さんに電話によるフォローアップを試みた。当病棟は全室個室で、病室等の設備面をより充実させていることから、新しい患者サービスの試みとして当病棟から始めた。私たち看護師は退院後の患者さんの状況について知る機会はなかったため、退院後の患者さんの経過を確認することで患者さんの満足度を高めることや、患者さんから得られた情報をフィードバックし業務改善に活かすことを目的として、電話によるフォローアップに取り組んだ。対象者は自宅退院した患者さんとし、退院時に了承を得られた方に電話によるフォローアップを行い、病棟師長と病棟係長が対応した。内容としては、退院後の病状や生活状況、内服薬の管理、入院中の病院職員の対応や要望についてインタビュー形式で確認した。結果、患者さんからは、「電話してもらって安心した」「いろんなことを聞けてよかった」「医師・看護師・看護助手・清掃スタッフの言葉遣いが丁寧でよかった」という言葉を聞くことができ、安心感・満足感を得ていた。対応した看護師は、患者さんが入院中や退院後に思っていることを知ることができ、今後の看護や患者指導に役立つと感じることが出来た。また、退院した患者と電話で話すことにより、継続した看護を行っているという充実感・実感を持つことができた。このことから、電話によるフォローアップは患者さん看護師双方により結果をもたらすと考え、今後も継続していきたい患者サービスである。今後の課題として対応時間の確保や、対応スタッフの教育、得られた意見をどのように活かしていくかが挙げられる。将来的には、病院全体で取り組む患者サービスとなることを目標にしたい。

P-043

ガマ腫に対するOK-432注入療法を施行した4例

足利赤十字病院 口腔外科

○丸山 亮、八木沢就真、青山 裕美、瀧永 哲、
佐藤 祐介、山根 伸夫

ガマ腫は舌下腺に由来する粘液嚢胞で、その多くは口底部にやや青みを帯びた透明感のある片側性の腫瘍として認められる。この嚢胞が顎舌骨筋を越えて顎下、オトガイ、頸部にまで腫脹をきたすこともある。ガマ腫の治療法としては一般的に外科療法としては開窓術、嚢胞全摘術と舌下腺摘出術との併用などが行われている。しかしガマ腫の成因を考えると再発を繰り返す症例も少なくない。再発を繰り返す症例には舌下腺摘出術の併用が根治的な治療といえるが、舌下腺摘出術は全身麻酔が必要となり、患者侵襲も大きい。近年OK-432を用いた良好な治療成績に着目し、当院でもガマ腫の治療法に加え、注入療法を行うことにした。2013年1月現在までに4例の患者に施行したので、その治療効果および工夫点について報告する。症例の概要については、症例1:10歳女児、顎下舌下型ガマ腫、症例2:32歳女性、顎下舌下型ガマ腫、症例3:62歳男性、舌下型ガマ腫、症例4:24歳女性舌下型ガマ腫。各症例ともにビシパニール注入量は1.5KEとした。入院外来の内訳は入院2例、外来2例。再診の間隔は処置後初回は約1週間、その後は2週間毎の再診間隔とした。処置後合併症は、大きな合併症はなく軽度の倦怠感と微熱のみであった。嚢胞消失までの期間は症例ごとに異なっており、最短のものでは1週間後から縮小し、2週間で完全消失に至った。また処置回数については、症例3のみ2回処置施行している。全般的に経過良好で、簡便かつ安全な治療として今後ガマ腫治療の第一選択となっていくと思われる。

P-042

14歳女児に発生したPlunging Ranulaの1例

深谷赤十字病院 歯科口腔外科¹⁾、
千葉大学医学部附属病院 歯科・顎・口腔外科²⁾、
千葉大学大学院医学研究院 臨床分子生物学講座³⁾、
深谷赤十字病院 外科⁴⁾

○吉村 周作^{1,3)}、山野由紀男¹⁾、肥後 盛洋²⁾、小池 博文²⁾、
笠松 厚志^{2,3)}、坂本 洋右²⁾、鶴澤 一弘^{2,3)}、丹沢 秀樹^{2,3)}、
伊藤 博⁴⁾

患者は14歳女児で、主訴は右側顎下部の腫脹であった。初診時の所見として、顔貌は左右非対称で、右側顎下部に弾性軟で無痛性の腫脹を認めた。表面皮膚は正常で、発赤や圧痛は認めなかった。口腔内においては口底部に発赤・腫脹は認めず、口底粘膜は正常色を呈しており、舌下小丘からの唾液流出は両側とも良好であった。画像所見では、造影MRIにおいて右顎下腺前方、顎舌骨筋外側にT1強調像で低信号、T2強調像で高信号を呈する内部均一で境界明瞭な病変を認めた。Plunging Ranulaの診断のもと、全身麻酔下にて右側舌下腺摘出術を施行した。舌下腺摘出後、顎下部を圧迫すると顎舌骨筋裂隙より血液混じりの透明性を有した粘液の排出をみた。粘液をすべて吸引し、創面は一次閉鎖した。術後は口腔外から圧迫ガーゼにより顎下部を5日間圧迫した。術後経過は良好で、術後7日目に退院となった。術後6か月を経過した現在、再発および合併症等もなく経過良好である。

P-044

姫路赤十字病院歯科口腔外科20年における口腔癌と同時性多重癌症例の検討

姫路赤十字病院 歯科口腔外科

○小川 雄右、出原 絵里、福村 元洋、花田 泰明、
釜本 宗史、藤原 成祥

【緒言】高齢者人口の増加、悪性腫瘍の早期発見や治療技術の進歩に伴い、同一固体に2つ以上の悪性腫瘍が発生する多重癌は増加傾向にある。今回、過去20年間に姫路赤十字病院歯科口腔外科を受診した口腔癌患者の中で他臓器に同時性多重癌を認めた症例について検討を行ったので報告する。

【目的】口腔癌患者における多重癌の臨床的特徴や治療について検討する。

【対象】1991年1月から2011年12月の過去20年間に当科を受診した口腔癌患者567症例のうち、同時性多重癌を認めた13例を対象とした。

【結果】口腔癌の発生部位は頬粘膜4例、舌3例、下顎歯肉3例、上顎歯肉2例、口底1例であった。他臓器では胃6例、食道3例、肝臓、大腸が1例、その他3例であった(3重癌を含む)。13例のうち、口腔癌が先に発見されていたのが12例で、他癌発見経路では術前の内視鏡検査が9例と最も多かった。口腔癌の治療を行わなかった例は1例のみで、7例で手術療法を施行し、その他で放射線治療、化学療法併用療法を行った。他癌の治療は9例で手術療法を施行し、2例で化学療法を、1例で放射線治療を行った。

【結論】口腔癌の同時性多重癌は胃、食道に多く認められた。従来の報告通り、口腔癌患者において胃・食道内視鏡検査が多重癌の発見に有用であることが再確認され、他科との連携により口腔癌の治療を遂行することが可能と考える。